

しんこくおつじこよ
神国王御書

〔それおもんみれば、日本国をまたは水穂みずほの国、または野馬台やまと、または秋津嶋あきつしま、または扶桑等と云ふ〕云云。六十六国・二つの嶋、已上六十八ヶ国。東西三千余里、南北は不定ふじょうなり。この国に五畿七道あり。五畿と申すは山城やましろ・大和やまと・河内かわち・和泉いずみ・摂津せつつ等なり。七道と申すは東海道十五箇国・東山道八箇国とつさんどう・北陸道七ヶ国・山陰道八ヶ国・山陽道八ヶ国・南海道六ヶ国・西海道十一ヶ国。〔また鎮西ちんせい、または太宰府だざいふと云ふ〕云云。已上これれは国なり。国主をたづぬれば、神代十二代は天神七代かみよ・地神五代てんじんなり。天神七代の第一は国常立尊くにとこたちのみこと、乃至ないし、第七は伊奘諾尊いざなぎのみこと、男なり。伊奘册尊いざなみのみこと、妻なり。地神五代の第一は天照太神あまてらすおおみかみ、伊勢太神宮日の神いせだいじんくうひこれなり。いざなぎ・いざなみの御女おんむすめなり。乃至ひこなぎ、第五は彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊ひこなぎさたけうがやぶきあえずのみこと。この神は第四のひこほの御子みこなり。母は竜りゅうの女むすめなり。已上地神五代。已上十二代は神世かみよなり。人王にんのうは大体ひやくだい百代ひゃくだいなるべきか。そ

の第一の王は神武天皇、これはひこなぎさの御子なり。乃至、第十四は仲哀天皇、八幡の御父なり。第十五は神功皇后、八幡の御母なり。第十六は応神天皇にして仲哀と神功の御子。今の八幡大菩薩なり。乃至、第二十九代は宣化天皇なり。この時まで月氏・漢土には仏法ありしかども、日本国にはいまだわたらず。

第三十代は欽明天皇。この皇は第二十七代の継体の御嫡子なり。治三十二年。この皇の治十三年、壬申、十月十三日、辛酉、百済国の聖明皇、金銅の釈迦仏を渡し奉る。今日本国の上下万人一同に阿弥陀仏と申すこれなり。「その表文に云く、「臣聞く、万法の中には仏法最も善し。世間の道にも仏法最も上なり。天皇陛下もまた修行あるべし。故に敬て仏像・経教・法師を捧げて使に附して貢献す。宜しく信行あるべき者なり」と已上。しかりといへども、欽明・敏達・用明の三代三十余年は崇め給ふ事なし。その間の事さまざまなりといへども、その時の天変地天は今の代にこそにて候へども、今はまたその代にはにるべくもなき変天なり。

第三十三代崇峻^{すしゆん}天皇の御宇^{ぎよう}より仏法^わ我が朝^{ちよう}に崇められて、第三十四代推古^{すいこ}天皇の御宇^{ぎよう}に盛^{さかん}にひろまり給いき。この時、三論^{さんろん}宗^{しゆう}と成実^{じようじつ}宗^{しゆう}と申す宗、始めて渡つて候ひき。この三論宗は、月氏^{げつし}にても漢土^{わんど}にても日本^{にっぽん}にても、大乘^{だいじよう}の宗^{しゆう}の始めなり。故に宗の母とも、宗の父とも申す。人王^{にんのう}三十六代に皇極^{こうぎよく}天皇の御宇^{ぎよう}に禅宗^{ぜん}わたる。人王^{にんのう}四十四代天武^{てんむ}の御宇^{ぎよう}に法相^{ほつそう}宗^{しゆう}わたる。人王^{にんのう}四十四代元正^{げんしやう}天皇の御宇^{ぎよう}に大日^{だいにか}経^{けい}わたる。人王^{にんのう}四十五代に聖武^{せいむ}天皇の御宇^{ぎよう}に華嚴^{けごん}宗^{しゆう}を弘通^{くわうつう}させ給ふ。人王^{にんのう}四十六代孝謙^{こうけん}天皇の御宇^{ぎよう}に律宗^{りつしゆう}と法華^{ほつけしゆう}宗^{しゆう}わたる。しかりといへども、ただ律宗ばかりを弘めて、天台法華宗は弘通なし。人王^{にんのう}第五十代に最澄^{さいじやう}と申す聖人^{しやうにん}あり。法華宗を我^{われ}と見出して、俱舍^{くしや}宗^{しゆう}・成実^{じようじつ}宗^{しゆう}・律宗^{りつしゆう}・法相^{ほつそう}宗^{しゆう}・三論^{さんろん}宗^{しゆう}・華嚴^{けごん}宗^{しゆう}等の六宗^{りくしゆう}をせめをとし給ふのみならず、漢土^{わんど}に大日宗と申す宗ありとしろしめせり。同じき御宇^{ぎよう}に漢土^{わんど}にわたりて、四宗^{ししゆう}をならいわたし給ふ。いわゆる法華宗・真言宗・禅宗・大乘の律宗なり。しかりといへども、法華宗と律宗とをば弘通ありて、禅宗をば弘め給はず。真言宗をば宗の字をけづり、たゞ七大寺等の諸僧^{しよそう}に灌頂^{かんじやう}

を許し給ふ。しかれども世間の人々は、いかなる故という事をしらず。当時の人々の云く、この人は漢土にて法華宗をば委細にならいて、真言宗をばくはしく知し食し給はざりけるか、とすい（推）し申すなり。

同じき御宇に空海と申す人、漢土にわたりて真言宗をならう。しかりといへども、いまだこの御代には帰朝なし。人王第五十一代に平城天皇の御宇に帰朝あり。五十二代嵯峨の天皇の御宇に、弘仁十四年 癸卯 正月十九日に、真言宗の住処東寺を給ひて護国教王院とがうす。伝教大師御入滅の一年の後なり。人王五十四代仁明天皇の御宇に、円和尚漢土にわたりて、重ねて法華・真言の二宗をならいわたす。人王五十五代文徳天皇の御宇に、仁寿と斉衡とに金剛頂經の疏・蘇悉地經の疏、已上十四卷を造りて、大日經の義釈に並べて真言宗の三部とがうし、比叡山の内に捺持院を建立し、真言宗を弘通する事この時なり。叡山に真言宗を許されしかば、座主両方を兼たり。しかれども法華宗をば月のごとく、真言宗をば日のごとくといひしかば、諸人等は真言宗はすこし

勝れたりとをもちけり。しかれども座主は両方を兼て兼学し給ひけり。大衆もまたかくのうとし。

同じき御宇に円珍和尚と申す人御入唐。漢土にして法華・真言の両宗をならう。同じき

御代に天安二年に帰朝す。この人は、本朝にしては叡山第一の座主義真・第二の座主

円澄・别当光定・第三の座主円仁等に、法華・真言の両宗をならいきわめ給ふのみ

ならず、また東寺の真言をも習ひ給へり。その後漢土にわたりて法華・真言の両宗をみがき給ふ。今の三井寺の法華・真言の元祖智証大師これなり。已上四大師なり。掄じて日本国には真言宗にまた八家あり。東寺に五家、弘法大師を本とす。天台に三家、慈覚

大師を本とす。

人王八十一代をば安徳天皇と申す。父は高倉院の長子、母は太政入道の女

建礼門院なり。この王は元暦元年乙巳三月二十四日、八嶋にして海中に崩じ給

ひき。この王は源頼朝將軍にせめられて、海中のいろくづの食となり給ふ。人王八

十二代は隱岐の法皇と申す、高倉の第三王子、文治元年 丙午 御即位。八十三代に
 は阿波の院、隱岐の法皇の長子、建仁二年に位に継ぎ給ふ。八十四代には佐渡の院、隱
 岐の法皇の第二の王子、承久三年 辛巳 二月二十六日に王位につき給ふ。同じき
 七月に佐渡のしまへうつされ給ふ。この二・三・四の三王は父子なり。鎌倉の右大将の
 家人義時にせめられさせ給へるなり。
 ここに日蓮大に疑つて云く、仏と申すは三界の国主、大梵王・第六天の魔王・帝釈
 ・日・月・四天・転輪聖王・諸王の師なり、主なり、親なり、三界の諸王は皆この
 釈迦仏より分ち給ひて、諸国の総領・別領等の主となし給へり。故に梵・釈等は
 この仏を、或は木像、或は画像等にあげめ給ふ。須臾も相背かば、梵王の高台もく
 づれ、帝釈の喜見もやぶれ、輪王もかほり(冠)落ち給ふべし。神と申すはまた国々の
 国主等の崩御し給へるを、生身のごとくあげめ給う。これまた国王・国人のための父母
 なり、主君なり、師匠なり。片時もそむかば国安穩なるべからず。これを崇むれば、国

は三災を消し七難を払ひ、人は病なく長寿を持ち、後生には人天と三乗と仏となり給ふべし。

しかるに我が日本国は一閻浮提の内、月氏・漢土にもすぐれ、八万の国にも超へたる国ぞかし。その故は月氏の仏法は、西域(記)等に載せられて候にはただ七十余ヶ国なり。

その余は皆外道の国なり。漢土の寺は十万八千四十所なり。我朝の山寺は十七万一千

三十七所。この国は月氏・漢土に対すれば、日本国に伊豆の大嶋を対せるがごとし。寺をかずれば漢土・月氏にも雲泥すぎたり。かれはまた大乘の国・小乗の国、大乘も

権大乘の国なり。これは寺ごとに八宗・十宗をならい、家々宅々に大乘を誦誦す。

かの月氏・漢土等は仏法を用ふる人は千人に一人なり。この日本国は外道一人もなし。

その上、神はまた第一天照太神・第二八幡大菩薩・第三は山王等の三千余社。昼夜に

我が国をまほり、朝夕に国家を見そなわし給ふ。その上、天照太神は内侍所と申す明

鏡にかげをうかべ、大裏にあがめられ給ひ、八幡大菩薩は宝殿をすてて、主上の頂

を栖すみかとし給ふと申す。

仏かこの加護と申し、神の守護と申し、いかなれば彼かの安德と隱岐と阿波・佐渡等の王は、相伝そうでんの所しよじゆう従等にせめられて、或は殺され、或は嶋はなに放たれ、或は鬼となり、或は大地獄だいじしよくに墮おち給ひしぞ。日本国の叡山えいざん・七寺・東寺・園城等おんじようとうの十七万一千三十七所の山々寺々に、いさゝかの御仏事おんぶつじを行ふには、皆天長地久てんちようちきゆう、玉体安穩ぎよくたいあんとこそいのり給ひ候へ。その上、八幡大菩薩はつぱんは殊ことに天王守護てんのうしゆごの大願たいがんあり。人王第四十八代たかのに高野天皇の玉体いに入り給ひて云く、「我が国家開闢こつかかいびやく以来、臣しんをもつて君きみとなすこといまだあらざる事ことなり。天之日嗣あまつひつぎは必ず皇緒こうしよを立つ」等云。また「太神おおみかみ、行教ぎようきように付して云く、我われに百王守護ひやくおうしゆごの誓ちかじあり」等云。されば神武天皇より已来百王このかたにいたるまでは、いかなる事ことありとも玉体はつゝがあるべからず。王位おういを傾かたむくる者もあるべからず。一いつしよ生補しよふ処しよの菩薩ちゆふつは中天しよてんなし。聖人しよじんは横死おうしせずと申す。いかにとして彼々かれがれの四王は王位おういををいをとされ、国をうばわるるのみならず、命を海にすて、身を嶋々いに入れ給ひけるやらむ。

天照太神は玉体に入りかわり給はざりけるか。八幡大菩薩の百王の誓ちかいはいかにとなりぬぞ。

その上、安徳天皇の御宇には、明雲座主御師みようんざすおんしとなり、太上入道たじようにゆうどう並に一門怠状を捧げて云く「彼の興福寺をもつて藤氏の氏寺となし、春日の社をもつて藤氏の氏神となせしがごとく、延曆寺をもつて平氏の氏寺と号し、日吉の社をもつて平氏の氏神と号す」云云。叡山には明雲座主を始として三千人の大衆、五壇の大法を行ひ、大臣以下家々に尊勝陀羅尼・不動明王を供養し、諸寺諸山には奉幣し、大法秘法を尽さずといふ事なし。また承久の合戦の御時は天台座主慈円・仁和寺の御室・三井等の高僧等を相催し、日本国にわたれる所の大法秘法残りなく行なわれ給ふ。いわゆる承久三年あしもよあの辛巳四月十九日に十五壇の法を行はる。天台座主は一字金輪法等。五月二日は仁和寺の御室、如法愛染明王法を紫宸殿にて行ひ給ふ。また六月八日には御室、守護おむろ経法しゆこを行ひ給ふ。已上四十一人の高僧十五壇の大法、この法を行ふ事は日本に第二度な

り。権ごんの大夫殿たゆうはこの事を知り給ふ事なければ、御調伏ごじようぶくも行ひ給はず。またいかに行ひ給ふとも、かの法々、かの人々にはすぐべからず。仏法の御力おんちからと申し、王法の威力いりよくと申し、彼は国王かれなり、三界の諸王守護し給ふ。此これは日本国の民たみなり、わづかに小鬼しよくきぞまほりけん。代々だいだいの所従しよじゆう、重々じゆうじゆうの家人けにんなり。譬へば王威を用ひて民をせめば、鷹きの雉きをとり、猫ねこのねずみを食くらひ、蛇へびがかへるをのみ、師子王ししおうの兔うさぎを殺すにてこそあるべし。なにしにか、かるがるしく天神地祇てんじんちぎには申すべき。仏・菩薩をばをどろかし奉るべき。師子王が兔をとらむに精進しよくじんをすべきか。たかがきじを食くらはんにいのりあるべしや。いかにいのらずとも、大王の身として民を失はんには、大水だिसуйの小火しよくかをけし、大風だифうの小雲しよくうんを巻まくにてこそあるべけれ。その上、大火だいかに枯木かれきを加ふるがごとく、大河たいがに大雨だいうを下すがごとく、王法の力に大法を行ひ合せて、頼朝よりともと義時よしときとの本命ほんめいと元神がんじんとをば、梵王と帝釈等ぬきとに抜取ぬきとらせ給ふ。譬へば古酒こしゆに酔へる者のごとし。蛇かえるの蝦かえるの魂たまを奪かふがごとし。頼朝と義時との御魂おんたましい・御名おんな・御姓おんじゆをばかきつけて、諸尊しよそん・諸神等しよじんの御足みあしの下にふま

せまいらせていのりしかば、いかにもこらうつべしともみへざりしに、いかにとして
 一年一月も延びずして、わずかに二日一日にはほろび給ひけるやらむ。仏法を流布の国
 の主とならむ人々は、能能御案ありて、後生をも定め、御いのりもあるべきか。
 しかるに日蓮、この事を疑ひしゆへに、幼少の比より随分に顕密二道並に諸宗の一切の
 経を、或は人にならない、或は我と開き見し、勘へ見て候へば、故の候ひけるぞ。我が面
 を見る事は明鏡によるべし。国土の盛衰を計ることは仏鏡にはすぐべからず。仁王
 経・金光明経・最勝王経・守護経・涅槃経・法華経等の諸大乘経を開き見奉り候
 に、仏法に付きて国も盛へ、人の寿も長く、また仏法に付きて国もほろび、人の寿も短
 かるべしとみへて候。譬へば水は能く舟をたすけ、水は能く舟をやぶる。五穀は人をや
 しない、人を損ず。小波小風は大船を損ずる事かたし。大波大風には小舟やぶれや
 すし。王法の曲るは小波小風のごとし。大国と大人をば失ひがたし。仏法の失あるは大
 風大波の小舟をやぶるのごとし。国のやぶるゝ事疑ひなし。仏記に云く、我滅後、末代

には悪法・悪人の国をほろぼし、仏法を失はんには失すべからず。譬へば三千大千世界の
 草木を薪たきぎとして須弥山しゆみせんをやくに、やけず。劫火こつがの時、須弥山の根ねより大豆計りの火出
 て須弥山をやくがごとく、我わが法もまたかくのごとし。悪人・外道げどう・天魔てんま・波旬はじゆん・五
 通等ごつうとうにはやぶられず。仏のごとく、六通ろくつうの羅漢らかんのごとく、三衣さんねを皮のごとく身に紕まとい、
 一鉢いちぼつを両眼りやうがんにあてたらむ持戒じがいの僧等そうらと、大風の草木をなびかすごとくなる高僧等、我
 が正法しやうぽうを失ふべし。その時、梵・釈・日月・四天しつてんいかりをなし、その国に大天変だいてんべん・大
 地天等ちよつてんを發おこしていさめむに、いさめられずば、その国の内に七難しちなんををこし、父母・兄弟
 ・王臣わうしん・万民互ばんみんごに大怨敵だいにんてきとなり、梟きやう鳥ちやうが母を食くらひ、破鏡はけいが父をがいするがごとく、
 自国じこくをやぶらせて、結句けつこは他国たこくよりその国をせめさすべしとみへて候。
 今日蓮けふれん、一代聖教いちだいせいぎょうの明鏡めいけいをもつて日本国にっぽんこくを浮うかべ見候に、この鏡に浮んで候人々は、
 国敵こくてき・仏敵ぶつてきたる事疑ひなし。一代聖教の中に、法華経は明鏡の中の神鏡しんきやうなり。銅鏡等どうけいとう
 は人の形をばうかぶれども、いまだ心をばうかべず。法華経は人の形を浮ぶるのみならず、

心をも浮べ給へり。心を浮ぶるのみならず、先業をも未来をも鑑み給ふ事くもりなし。
 法華經の第七の巻を見候へば、「如来の滅後において、仏の所説の經の因縁及び次第を
 知つて、義に随つて実のごとく説かん。日月の光明の能く諸の幽冥を除くがごとく、斯
 の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」等云云。文の心は、この法華經を一字も一句
 も説く人は、必ず一代聖教の浅深と次第とを能く弁へたらむ人の説くべき事に候。譬
 へば曆の三百六十日をかながうるに、一日も相違せば万日俱に反逆すべし。三十一字
 を連ねたる一句一字も相違せば、三十一字共に歌にてあるべからず。たとひ一經を讀誦
 すとも、始め寂滅道場より終り双林最後にいたるまで、次第と浅深とに迷惑せば、
 その人は我が身も五逆を作らずして無間地獄に入り、これを帰依せん檀那も阿鼻大城
 に墮つべし。いかにいわんや、智人一人出現して一代聖教の浅深・勝劣を弁えん時、元祖
 が迷惑を相伝せる諸僧等、或は国師となり、或は諸家の師となりなどせる人々、自
 らのきずが顕るゝ上、人にかろしめられん事をなげきて、上に挙ぐる一人の智人を、或

は国主に訴へ、或は万人にそしらせん。その時、守護の天神等の国をやぶらん事は、芭蕉の葉を大風のさき、小舟を大波のやぶらむがごとしと見へて候。

無量義経は、始め寂滅道場より終り般若経にいたるまでの一切経を、或は名を挙げ、

或は年紀を限りて「未顕真実」と定めぬ。涅槃経と申すは、仏最後の御物語に、初め

初成道より五十年の説教の御物語、四十余年をば無量義経のごとく邪見の経と定め、

法華経をば我が主君と号し給ふ。中に法華経ましまして、已今当の勅宣を下し給ひし

かば、多宝・十方の諸仏加判ありて、各々本土にかへり給ひしを、月氏の付法蔵の二十

四人は、ただ小乗・権大乘を弘通して、法華経の実義を宣べ給ふ事なし。譬へば日本国

の行基菩薩と鑑真和尚との、法華経の義を知り給ひて弘通なかりしがごとし。漢土の

南北の十師は、内にも仏法の勝劣を弁へず、外にも浅深に迷惑せり。また三論宗の吉蔵

・華嚴宗の澄観・法相宗の慈恩、これらの人々は、内にも迷ひ外にも知らざりしかど

も、道心堅固の人々なれば、名聞をすて、天台の義に付きにき。知らず、さればこの

人々は懺悔さんげの力に依りて生死やはなれけむ。はたまた謗法ぼうぼうの罪は重く、懺悔の力は弱くして、阿闍世王あじゃせおう・無垢論師等のごとく地獄にや墮おちにけん。

善無畏三蔵ぜんむいさんそう・金剛智三蔵こんごうち・不空三蔵等ふうくうとうの三三蔵さんさんそうは、一切の真言師の申すは、大日如来より五代六代の人々、即身成仏そくしんじょうぶつの根本こんぽんなり等云云。日蓮勤へて云く、法偷ほうちゆうの元師がんしなり、

盗人ぬすびとの根本こんぽんなり。これらの人々は、月氏だいにちぎようよりは大日経こんごうちよう・金剛頂経そしつち・蘇悉地経等しそじゆつを齋もてきた来る。この経々は華嚴・般若・涅槃経等に及ばざる上、法華経に対すれば七重の

下劣げれつなり。経文に見へて赫々かくかくたり明々めいめいたり。しかるを漢土きたに來りて天台大師の止觀しかん等の三十巻を見て、舌をふるい心をまどわして、これに及ばずば我が経弘通くわうつうしがたし。勝すく

れたりといはんとすれば妄語まつご眼前がんぜんなり。いかんがせんと案ぜし程に、一つの深き大妄語だいまつごを案あんじ出し給ふ。いわゆる大日経の三十一品を、法華経二十八品並に無量義経に腹あわ

せに合せて、三密さんみつの中の意密いみつをば法華経に同じどう、その上に印いんと真言しんごんとを加へて、法華経は略りやくなり、大日経は広こつなり。已いにも入れず、今こんにも入れず、当とうにもはづれぬ。法華

経をかたうどとして三説の難を脱れ、結句は印と真言とを用ひて、法華経を打落して真
 言宗を立て、候。譬へば三女が后と成りて三王を喪せしがごとし。法華経の流通の
 涅槃経の第九に、「我れ滅して後、悪比丘等我が正法を滅すべし。譬へば女人のごとし」
 と記し給ひけへるはこれなり。されば善無畏三蔵は閻魔王にせめられて、鉄の縄七脈つ
 けられて、からくして蘇りたれども、また死する時は黒皮隠々として骨甚だ露はる
 と申して、無間地獄の前相をその死骨に顕はし給ひぬ。人死して後ち色の黒きは地獄に
 墮つとは、一代聖教の定むるところなり。金剛智・不空等もまたこれをもて知んぬべし。
 この人々は改悔はありと見へて候へども、強盛の懺悔のなかりけるか。今の真言師は
 またあへて知る事なし。玄宗皇帝の御代の喪し事も不審はれて候。
 日本国はまた弘法・慈覚・智証、この謗法を習ひ伝へて自身も知るしめさず、人はま
 たをもいもよらず。しばらくは法華宗の人々相論ありしかども、終には天台宗やうやく
 衰へて、叡山五十五代の座主明雲、人王八十一代の安徳天皇より已來は、叡山一向に

真言宗となりぬ。第六十一代の座主顯真權僧正は、天台座主の名を得て真言宗に遷るけんしんこんそつじょうのみにらず、しかる後、法華・真言をすて、一向謗法の法然が弟子となりぬ。承久調伏じよつきゆうじよつじやくの上衆慈円僧正は、第六十二代並に五・九・七十一代の四代の座主、隱岐の法皇の御師なり。これらの人々は善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・慈覚・智証等の真言をば、器うつわはかわれども一の智水ちすいなり。その上、天台宗の座主の名を盗みて、法華經の御領ごりょうを知行して三千の頭かしらとなり、一国の法の師と仰あおがれて、大日經を本もととして七重しちじゆうくだれる真言を用ひて、八重勝はちじゆうすくれりとをもへるは、天を地とをもち、民を王とあやまち、石を珠たまとあやまつのみならず、珠を石という人なり。教主釈尊・多宝仏・十方の諸仏の御怨敵ごおんてきたるのみならず、一切衆生の眼目がんもくを奪ひ取り、三善道の門とを閉ぢ、三悪道の道さんあくどうを開く。梵・釈・日月・四天等の諸天善神、いかでかこの人を罰せさせ給はざらむ。いかでかこの人を仰ぐ檀那をば守護し給ふべき。天照太神の内侍所も、八幡大菩薩の百王守護の御おんちかひも、いかでか叶かなはせ給ふべき。

余よ、この由をかつ知りしより已このかた来いちぶん、一分の慈悲に催されて、ほほ随分の弟子にあら／＼
 申せし程に、次第に増長して国主まで聞きこえぬ。国主は理りを親おやとし非ひを敵てきとすべき人にて
 をはすべきが、いかんがしたりけん、諸しよにん人の讒ざんげん言げんををさめて、一人の余よをすて給ふ。彼か
 の天台大師は南北の諸人あだみしかども、陳ちん・隋ずい二代の帝みかど重おもんじ給ひしかば、諸人の怨あだ
 もうすかりき。此この伝教大師は南都七大寺讒言せしかども、桓武かんむ・平城へいぜい・嵯峨さがの三皇用
 ひ給ひしかば、怨敵おんてきもをかしがたし。今日いま蓮は日本国十七万一千三十七所の諸僧等のあ
 だするのみならず、国主用ひ給はざれば、万民あだをなす事、父母の敵かたきにも超こへ、宿世すくせ
 のかたきにもすぐれたり。結句は二度の遠流おんる、一度の頭こつへに及ぶ。彼の大莊嚴かだいしよごんぶつの末法まつぽう
 の四比丘しびく、並に六百八十万億那由佗なゆたの諸人が、普事ふじびく比丘一人をあだみしにも超こへ、師子しし
 音王おんのうぶつの末すえの勝意しやうい比丘びくの無量の弟子等が、喜根きこん比丘びくをせめしにも勝まされり。覺徳かくとく比丘びく
 がせめられし、不輕ふきやうぼさつ菩薩ぼさつが杖じやうせく木くをかをほりしも、限りあればこれにはよもすぎじとぞ
 をばへ候。もし百千にも一つ日蓮法華經の行者にて候ならば、日本国の諸人、後生ごしやうの無む

間地獄はしばらくをく、現身には国を失ひ他国に取られん事、彼の徽宗・欽宗のごとく、
 優陀延王・訖利多王のごとくならむ。またその外は、或はその身は白癩・黒癩、
 或は諸悪重病疑ひなかるべきか。もしその義なくば、また日蓮法華經の行者にあらじ。
 この身現身には白癩・黒癩等の諸悪重病を受け取り、後生には提婆・瞿伽利等のごとく
 無間大城に墮つべし。日月を射奉る修羅はその矢還つて我が眼に立ち、師子王を吼
 る狗犬は我が腹をやぶる。釈子を殺せし波琉璃王は水中の中の大火に入り、仏の御身
 より血を出せし提婆達多は現身に阿鼻の炎を感じり。金銅の釈尊をやきし守屋は四天
 王の矢にあたり、東大寺・興福寺を焼きし清盛入道は現身にその身もう（燃）る病
 をうけにき。彼等は皆大事なれども日蓮が事に合はずれば小事なり。小事すらなおし
 るしあり。大事いかでか現罰なからむ。
 悦ばしいかな。經文に任せて五五百歳広宣流布をまつ。悲しいかな、鬪争堅固の
 時に當つてこの国修羅道となるべし。清盛入道と頼朝とは源平の両家、本より狗犬と

さる 猿猴とのごとし。小人小福の頼朝をあだみしゆへに、宿敵たる入道の一門はほろび
 し上、科なき主上の西海に沈み給ひし事は不便の事なり。これは教主釈尊・多宝・十方
 の仏の御使として、世間には一分の失なき者を、一国の諸人にあだますのみならず、
 両度の流罪に当て、日中に鎌倉の小路をわたす事朝敵のごとし。その外、小庵に
 は釈尊を本尊とし一切経を安置したりし、その室を刎ねこぼちて、仏像・経巻を諸人に
 ふまするのみならず、糞泥にふみ入れ、日蓮が懐中に法華経を入れまいらせて候ひし
 を、とりいだして頭をさんぐに打ちさいなむ。この事いかなる宿意もなし。当座の科
 もなし。ただ法華経を弘通する計りの大科なり。

日蓮天に向ひ声をあげて申さく、法華経の序品を拜見し奉れば、梵・釈と日月と、四
 天と竜王と、阿修羅と二界八番の衆と、無量の国土の諸神と集会し給ひたりし時、
 已今当に第一の説を聞きし時、我とも雪山童子のごとく身を供養し、薬王菩薩のごと
 く臂をもやかんとをいしに、教主釈尊、多宝・十方の諸仏の御前にして、今仏前に

おいて自ら誓言を説け」と諫曉し給ひしかば、幸に順風を得て、「世尊の勅
 のごとくまさに具に奉行すべし」と二処三会の衆一同に大音声を放ちて誓ひ給ひ
 しはいかんがあるべき。ただ仏前にてはかくのごとく申して、多宝・十方の諸仏は本土
 にかへり給ふ。釈尊は御入滅ならせ給ひてほど久しくなりぬれば、末代辺国に法華經の
 行者ありとも、梵・釈・日月等、御誓をうちわすれて守護し給ふ事なくば、日蓮がため
 には一旦のなげきなり。無始已来、鷹の前のきじ、蛇の前のかへる、猫の前のねずみ、
 犬の前のさるとありし時もありき。ゆめの代なれば、仏・菩薩・諸天にすかされまいらせ
 たりける者にてこそ候わめ。なによりもなげかしき事は、梵と帝と日月と四天等の、南
 無妙法蓮華經の法華經の行者の大難に値ふをすてさせ給ひて、現身に天の果報も尽きて、
 花の大風に散るがごとく、雨の空より下ることく、「其人命終、入阿鼻獄」と無
 間大城に墮ち給はん事こそ、あわれにはをばへ候へ。たとひ彼の人々、三世十方の諸仏
 をかたうどとして知らぬよしのべ申し給ふとも、日蓮はその人々には強きかたきなり。

もし仏のへんばをはずせば、梵・釈・日月・四天をば、無間大城には必ずつけたてまつるべし。日蓮が眼と口とをそろしくば、いそぎ／＼仏前の誓ひをばはたし給へ。

日蓮が口（以後欠落）

またむぎ（麦）ひとひつ（一櫃）・鷺目両貫・わかめ・かちめ・みる一俵給び了んぬ。干
い（飯）・やきごめ各々一かうぶくる給び畢んぬ。一々の御志はかきつくすべしと申
せども、法門巨多に候へば留め候ひ了んぬ。他門にきかせ給ふなよ。大事の事どもか
きて候なり。